



小西化学が 提唱する 内なるHERO とは

こころの資本(Psychological Capital、心理的資本)とは、ネブラスカ大学のフレッド・ルーサンス教授が提唱する概念です。

企業が持つ伝統的な資本には、経済的資本、人的資本、社会的ネットワーク資本などがあり、これらを充実させることが重要とされてきました。しかしながら成長企業や競争優位企業にはこれら伝統的資本以外に、こころの資本(心理的資本)と呼ばれるものを備えている会社が多いということが分かってきました。そしてこのこころの資本とポジティブ組織行動が大変深い関係にあるということも分かってきました。

HOPE

ホープ 希望

自ら高い目標を掲げ、
その目標に向けて
解決の道を見つける

これは自分の努力は別として単に良い結果を
祈るような話ではありません。
自ら高い目標を設定して、計画が困難にぶち
当たっても諦めずに解決の道を見つける力を
言います。

こころの資本と呼ばれる代表的な要素

EFFICACY

エフィカシー 自己効力感

自分の
能力・貢献に対する自信

自分が役に立っているのだと言う自信です。
自分の存在、自分の役割責任が組織にとって
重要だという確信です。

RESILIENCE

レジリエンス 復元力

困難があっても
乗り越えられるという自信

困難や危機に直面しても折れることなく元に戻る強靭さです。実は復元や回復以上の意味合いを含んでいて、困難を乗り越えてその後に元の状態以上のものになるということが重要です。また、今後恐らく経験するだろう難関や対立などを必ず乗り越えることができるという将来に対する自信をも含んでいます。

OPTIMISM

オptyimism 楽観性

明るいストーリーを
描く前向きさ

これは短絡的な楽観主義を意味するものではありません。物事にはいろいろな側面が存在し、厄介で実現不可能に感じるものであっても、物事の明るい側面に目を向けて成功へのストーリーを語ることによって周囲の人をワクワクさせて巻き込む魅力です。無謀な夢を語ることではなく、論理的に計算された勝算のある夢を語り、前向きな挑戦を誘発する明るさです。

これら4つのこころの資本は決して性格的なものやスローガンではありません。もともと誰しもが持っているもので、その時の状態を表すものなのです。状態を示すものですから努力して学習することによってこころの資本は高めることが可能である、つまり開発可能な資本なのです。さて、4つのこころの資本の頭文字を拾うとHEROとなります。こころの資本ですから、カッコ良く“内なるHERO”と呼びます。内なるHEROが高い状態と言うのは、その組織がイキイキとして新しいことに挑戦するエネルギーに満ち溢れているという状態です。組織においてこの内なるHEROを高めるには単独では困難を伴います。周囲の人を巻き込み、そして周りの人々の支援と協力を得て初めて可能となります。ここにおいてコミュニケーション、特に双方向のコミュニケーションである対話ということが重要に

なってきます。思い切った工夫や挑戦を可能とする為には、組織内で恐怖や不安を感じることなく自分の意見を伝えられる環境が前提となってきます。お互いに異なる考えを自由に交わすことができる環境、この状態のことを社員の意識の中に心理的安全性が備わっていると言います。また、自分の意見をしっかり持っていてもそもそもそれを伝えようとしない人がいるかもしれません。この場合もやはり対話ということが重要で、周囲の人が引き出してあげる環境は作れると考えます。小西化学では、内なるHEROを高めようと、社員が自ら、能動的に、そして当事者意識を持って、言わば“HEROプロジェクト”と呼べる取組が始まっています。この胎動こそが、“ポジティブ組織行動”と言えるものであり、小西化学を新たな成長ステージへと推し進める原動力となり得るものなのです。



代表取締役社長

小西 弘矩

目覚めよ！ 肉なるHERO



Hope

希望

目標に向けて
解決の道を
見つける力

Efficacy

自己効力感

自分の
能力・貢献に
対する自信

Resilience

復元力

困難があっても
乗り越えられる
という自信

Optimism

楽観性

明るい
ストーリーを描く
前向きさ

高めよ！

内なるHERO

Hope

希望

目標に向けて解決の道を見つける力

Efficacy

自己効力感

自分の能力・貢献に対する自信

Resilience

復元力

困難があっても乗り越えられるという自信

Optimism

楽観性

明るいストーリーを描く前向きさ

